

## セラピスト10か条 2版

	条文	説明文（1版の該当項目のもの）	自己チェックリスト
1	リハビリテーションマインドをもって専門職の使命を果たそう	リハビリテーションに関わるスタッフには、障害のある患者・家族の意思や価値観を尊重し、チームメンバーと共に力を合わせ、その人らしい生活の再建に向けて心を込めて取り組む使命があります。そして、人として誠実、公正に向き合い、前向きにチャレンジする精神、あきらめずに歩み続ける精神、人のために尽くす精神が大切です。これらの使命や精神は、回復期に限らず、急性期から生活期まで一貫したものであり、私たちがリハビリテーションスタッフであるための核となるものです。	<p>患者家族の意思・価値観を尊重し、共に歩んでいる</p> <p>リハビリテーションの立場から地域包括ケアに貢献している</p> <p>医療人として公正な判断、誠実な対応を行っている</p> <p>チャレンジ精神をもって、絶えず改善に向け取り組んでいる</p> <p>専門職としての責任を果たしチームの一員として多職種で協働している。</p>
2	心身機能の改善を図ろう	回復期リハビリテーション病棟の入院期間は、急性期の医学的管理が必要な段階を脱した後、様々な機能が回復に向かう時期にあたります。そのため、活動能力の向上とともに基本的な心身機能の改善アプローチを集中的かつ十分に行う必要があります。そして、退院後の在宅生活を見据えて障害の回復過程に応じた機能・活動・参加の介入バランスを考え、治療や支援を進めていくことが大切です。そうすることで、患者の生活において意味のある機能の回復を図ることができます。	<p>施設・部門で定められている標準的な評価方法によって評価を行っている</p> <p>定期的に再評価を行いプログラムを修正している</p> <p>ADL獲得と関連付けて心身機能の改善を図っている</p> <p>患者の状態に合わせた必要な種目・量の療法を施行している</p> <p>科学的根拠を参考にしながら療法を行っている</p>
3	生活場面でのADL向上を促進しよう	在宅生活を目指すには、基本的な心身機能の改善が日常生活の諸活動に搬化される必要があります。そのためには、リハ室内でのアプローチのみではなく、病棟での実際場面で患者の能力や行動および患者を取り巻く環境を評価し、治療介入することが必要です。このことが、病棟での能動的な生活の基礎となり、基本的な生活リズムの改善を促進し、看護・介護スタッフとの協働へとつながります。また、病棟(看護・介護)スタッフや他職種への有用な情報提供も実施でき、さらに難易度の高い生活機能獲得のための練習にもつなげることができます。	<p>入院当日から生活場面での評価を実施している</p> <p>病棟の生活場面で練習を実施している</p> <p>早朝や夕方のADL状況を把握、介入している</p> <p>患者のADL能力を看護師等と共有し、ケア方法を検討している</p> <p>患者の活動度や興味・関心を把握し、日課を計画・支援している</p>
4	ADLの獲得に向けて適切な装具・車椅子・福祉用具を導入しよう	患者の体格・姿勢・能力に合わせた車椅子・杖などの適合や生活ニーズに応じた福祉用具の選定をおこなうことで、患者のさらなる能力改善を図ることができます。下肢装具などは代償的に使用するだけでなく、治療手段として使用することも考えられます。退院後の介護用具については、物理的な介助量軽減だけでなく、患者・家族の意向を踏まえて選定することが重要です。	<p>装具・福祉用具の最新の情報を収集している</p> <p>機能や回復見込みを見極め、装具等の選定を行っている</p> <p>医師等と協働して適合・調整を行っている</p> <p>業者等と協力し、在宅環境の調整を計画している</p> <p>安全点検や更新の検討を行っている</p>
5	患者の行動と疾病の危険徴候を見逃さず、事故や感染を予防しよう	患者の安全は、医療において最も優先されるものです。疾病の発症・再発だけではなく、転倒／転落などの危険行動を予防するには、患者の健康状態、心身機能、行動特性、活動環境などを評価・観察し、危険を予知し、事前に対策をとることが重要です。また、院内感染を防止するためには、標準的な予防対策を遵守し、感染情報の共有化にも努めます。	<p>療法実施前に、疾病や感染等に関するリスクを確認している</p> <p>感染予防の研修・実習等へ定期的に参加している</p> <p>医療事故防止の研修・実習等へ定期的に参加している</p> <p>設備・機器・用具の点検・衛生管理を行っている</p> <p>事故や感染の発生を報告し、再発防止策を検討・提案している</p>
6	カンファレンスは、定期的に多職種で開催し、今後の方向性を多職種で検討・一致させよう	カンファレンスは、医師、看護師、ソーシャルワーカー、セラピストなど多職種が参加して定期的に開催し、現在の状況と、患者の前からの変化を担当者全員で確認しましょう。この中で、職種間での認識のずれや情報の不一致があれば即座に修正し、必要な情報を積極的に交換することが重要です。また、在宅生活に向けてチーム全員での退院時の目標(ゴール)設定を行い、これを達成するための各職種の専門的介入の方向性(方針)を決定・修正して行くことで、各職種が別々の考えや行動にならず、チームとして一つの目標に向かって進んで行くことができます。今後の大まかな方向性を決めるために、初回カンファレンスが重要ですが、その後定期的に開催し、リハの進捗状況、病状や家族状況を確認しながら、必要に応じて方向性やスケジュールの修正を行っていくことが重要です。	<p>事前に評価結果を要約するとともに、他職種の記録も確認している</p> <p>積極的に他職種と協議し、チーム目標の決定に参画している</p> <p>チーム目標達成に向けた役割分担と協業内容を明示している</p> <p>協議・決定内容が記録され、欠席時にはその記録を確認している</p> <p>協議結果を計画書に記載し、それを患者等に説明している</p>

	条文	説明文（1版の該当項目のもの）	自己チェックリスト
7	記録や情報伝達は多職種が理解できる内容、言葉で表現しよう	多職種が協働する回復期リハビリテーション病棟にあって、情報の共有は業務の根幹をなします。カルテなどの医療記録、病棟内情報伝達用の書類は多職種が理解、利用しやすいものでなければなりません。専門用語は適切な使用を心がけ、略語などの過度な使用は控えるようにします。作成する記録・情報の法規上の必要性、業務上の有効性を考慮し、作業量が適切な範囲に収まるよう配慮する必要もあります。	<p>記録は課題志向型医療記録に則り構造化し、SOAP等の様式で経過を記録している</p> <p>略語や専門用語は部門ルールに則って使用している</p> <p>評価・計画・療法の記録は漏れなく遅れなく行っている</p> <p>必要な情報は関係者に適宜確認・伝達し、それを記録している</p> <p>伝達相手には患者等の状況(Situation)、背景(Background)、判断(Assessment)、提案(Recommendation)を伝えている</p>
8	病棟や在宅で介護を担う家族や介護者とともに、ケア方法を検討しよう	家族や介護者に患者のADL能力に応じた介助方法を指導・援助していくことは、患者が獲得した能力を実践的かつ日常的に生活場面で使用することにつながります。また、退院後の生活場면을想定した介助方法の検討・練習を実施することが大切です。患者が活動する実際場面で介助者の能力を見極めながら、介助する誰もが安全に実現できる方法を提示することが大切です。家族等と一緒に介助の活動をしながら、その方法を伝達・指導することが必要です。	<p>看護師等と協議し、ケア方法を提示している</p> <p>家族等のケア場면을観察・評価している</p> <p>家族等が安全にできるケア方法を提示している</p> <p>在宅を想定したケア方法を提示・実践している</p> <p>介護事業者にケア方法を伝達している</p>
9	退院に向けての環境調整は過不足なく行い、地域スタッフに繋いでいこう	回復期リハビリテーション病棟入院中のリハは、退院後の生活を想定しながら行いましょう。入院中から地域スタッフとの連携を図り在宅生活の定着に向けた準備を進める必要があります。住宅改修に関しては、退院後の生活の中で機能が変化していくことも予測しながら、十分な準備をおこなうだけでなく、過剰な設備にならないような配慮・検討が必要です。	<p>入院当初から情報収集をしている</p> <p>家屋評価をしている</p> <p>退院にむけて計画的な外出・外泊をすすめている</p> <p>ADLの変化を見据えた改修の提案をしている</p> <p>家族、ケアマネジャー、業者と協議しながら進めている</p>
10	患者に寄り添い、その人らしい社会参加を支援しよう	基本的ADLは、患者の生活再建において基礎となるものですが、そのうえに創られる退院後の個別の暮らしのあり方は様々です。患者の生活や人生の背景を理解し、未来に向け希望と社会性のある暮らしを患者とともに描き、その実現に向けて多角的で包括的な支援を行います。そのためには、在宅生活において地域の社会資源が有効に活用されるよう調整し、家庭や社会における役割の再建、長期的視点での生きがいづくりや自己実現などへの働きかけも大切です。家庭内に止まることなく、少しでも地域社会の一員としての関わりが持てるよう、継続性のあるリハビリテーション計画を立案することが必要です。	<p>患者の歩んできた人生を理解し、個別性を尊重している</p> <p>患者・家族の心理や認識の状態や変化を把握している</p> <p>家族や社会の一員として出来ることを評価し、社会的役割を検討している</p> <p>生きがいや自己実現などの支援を長期的視点で計画している</p> <p>地域の包括的な支援ネットワークを構築し、活用している</p>